

令和3年度病害虫発生予察情報 発生予報第14号

令和4年3月14日

発表：福島県病害虫防除所

1 普通作物

作物名	病害虫名	地方	発生時期	発生量	予報の根拠	防除上注意すべき事項
水 稲 (育苗期)	いもち病	全 域	—	平年並	種子更新率は平年並と予想される(±)。	育苗箱施薬を使用する場合は、使用量を遵守するとともに、育苗ハウスの置床に薬剤が飛散しないよう注意する。
	ばか苗病	全 域	—	平年並	種子更新率は平年並と予想される(±)。	罹病苗は、見つけ次第ただちに抜き取り(発生が多い場合は育苗箱廃棄)、本田には持ち込まない。
	苗立枯病 (ピシウム属菌、フザリウム属菌等による立枯病)	全 域	—	平年並	天候予報(仙台管区气象台3月10日発表1か月予報)によると、4月の天気は数日の周期で変わり、平年と同様に晴れの日が多いと予想されている(±)。	ハウス内の急な温度上昇やかん水不足に注意し、適切な温度管理を行う。特に、出芽時の高温や育苗期の低温を避ける。
	もみ枯細菌病 (苗腐敗症)	全 域	—	平年並	種子更新率は平年並と予想される(±)。	ハウス内の急な温度上昇に注意し、催芽や出芽は28℃以下で行い、育苗期は30℃以上の高温や過湿を避ける。
	苗立枯細菌病	全 域	—	平年並	種子更新率は平年並と予想される(±)。	もみ枯細菌病(苗腐敗症)に準じるが、もみ枯細菌病に登録があっても本病には適用のない薬剤があるので、使用の際は注意する。

注) 予報の根拠の中で(+)は多発要因、(-)は少発要因、(±)は平年並要因であることを示す。

○育苗期共通の注意事項

- ①前作の稲わらや籾殻が伝染源となることがあるため、種籾の準備をする前に作業舎内を清掃する。
- ②未消毒種子の場合は、薬剤や温湯により消毒する。特に、生物農薬や温湯による消毒を行う場合は処理温度や処理時間に注意する。
- ③気温が低くても、日光が射している場合はハウス内が高温になりやすいので注意する。

2 果樹

作物名	病害虫名	地方	発生時期	発生量	予報の根拠	防除上注意すべき事項
リンゴ	リンゴハダニ	中通り 会津	— —	平年並 やや多い	越冬卵が確認されたほ場の割合は、中通りで平年並(±)、会津で平年よりやや高かった(+)	発芽1週間前までにマシン油乳剤を散布する。
モモ	せん孔細菌病	全域	—	平年並	前年秋期の新梢葉での発生ほ場割合は平年並(±)であったが、発生程度の高いほ場も見られた。 春型枝病斑の発生予測モデルによると今春の発生は平年並(±)と予測される。	春型枝病斑は発芽後頃から発生するので、ほ場内をよく観察し、徹底してせん除する。 開花直前及び落花直後の防除を徹底する。
	モモハモグリガ	全域	—	平年並	前年の越冬量調査において、発生地点割合は平年並であったが(±)、一部地点で越冬成虫が多かった。	初期の発生密度を抑えるために、第1世代幼虫発生期(落花10日後)にネオニコチノイド剤を散布する。
	シロカイガララムシ類	全域	—	やや多い	前年秋期の側枝寄生の発生ほ場割合は、平年よりやや高かった(+) 。	発芽前にマシン油乳剤を散布する。
	コスカシバ	全域	—	やや少ない	前年秋期の発生ほ場割合は、平年よりやや低かった(-)。	
ナシ	黒星病	全域	—	平年並	鱗片の越冬病斑の発生ほ場割合は、平年並であった(±)。	重点防除期である開花直前及び落花直後に薬剤防除を徹底する。
	ハダニ類	全域	—	平年並	越冬卵が確認されたほ場の割合は平年並であった(±)。	発生が多いほ場では、発芽10日前までにマシン油乳剤を散布する。

注) 予報の根拠の中で (+) は多発要因、(-) は少発要因、(±) は平年並要因であることを示す。

3 野菜

作物名	病害虫名	地方	発生時期	発生量	予報の根拠	防除上注意すべき事項
イチゴ	うどんこ病	全域	—	平年並	ほ場割合は平年並であった(±)。	多発すると防除が困難になるので、発生初期から防除を徹底する。
	灰色かび病	全域	—	平年並	ほ場割合は平年並であった(±)。	過湿にならないよう換気を行う。 発病果や罹病した果梗、老化葉などはハウス内に放置せず、適切に処分する。
	アブラムシ類	全域	—	平年並	ほ場割合は平年並であった(±)。	発生状況をよく確認し、低密度時から防除を実施する。
	ハダニ類	全域	—	やや多い	ほ場割合は平年並であった(±)が、 天候予報(3月10日発表)によると、向こう1か月の気温は高く、平年同様に晴れの日が多いと予想されている(+) 。	発生状況をよく確認し、低密度時から防除を徹底する。 抵抗性の発達が懸念されるので、殺ダニ剤の選択には注意する(令和3年10月12日付け防除情報参照)。 カブリダニ類等天敵製剤を放飼している場合は、天敵に影響の小さい薬剤を選択する。
	コナジラミ類	全域	—	平年並	ほ場割合は平年並であった(±)。	低密度時から防除を実施する。
	アザミウマ類	全域	—	平年並	ほ場割合は平年並であった(±)。	巡回調査においてアザミウマ類による果実被害が確認された。今後ハウス側面等の開閉で外部からの侵入が懸念されるので、花をよく観察し、低密度時から防除を実施する。

注) 予報の根拠の中で (+) は多発要因、(—) は少発要因、(±) は平年並要因であることを示す。